



(出石 石)

兵庫・袴狭遺跡（内田地区）

1 所在地 兵庫県出石郡出石町袴狭字内田

2 調査期間 一九九二年(平4)一一月~一九九三年一月

3 発掘機関 出石町教育委員会

4 調査担当者 小寺 誠

5 遺跡の種類 官衙跡か

6 遺跡の年代 平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

袴狭遺跡は町を縦断して流れる出石川の支流である袴狭川流域に確認された河川跡の遺跡で、これまでも二〇点以上の木簡が出土し

ている『木簡研究』一一・一
三・一四)。この遺跡の出土

遺物のうち最も多いのが奈

良・平安時代の木製祭祀具

で、すぐ北に位置する砂入

遺跡や田多地小谷遺跡、鳴

遺跡など広範囲から八~九

世紀代の祭祀具が出土する。

と総称され、出土する木製祭祀具の量は数万点にも達している。このような状況のため、付近に何らかの官衙跡を想定して

いたが、一九九〇年兵庫県教育委員会の確認調査により袴狭川

上流の内田地区において建物跡と思われる整地面と柱根が確認された。この結果をふまえ、今

回国庫補助による学術調査を出

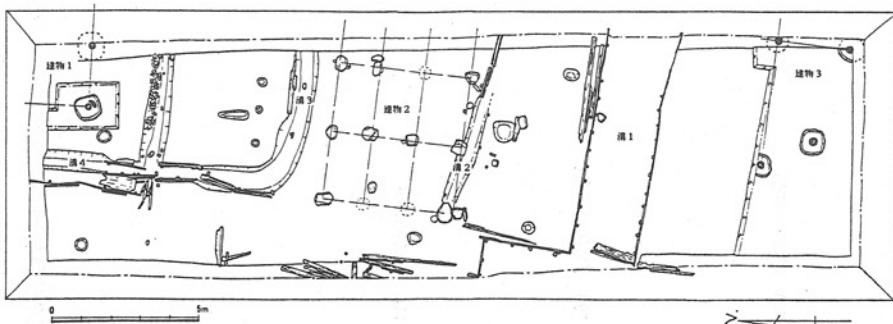
石町教育委員会が実施することとなつた。

調査面積は約三〇〇m²。礎石

建物一棟、掘立柱建物二棟とこれら建物群に伴う溝四条が見つかった。特に溝1は建物群の南

端を区画する整備された水路で、幅一五cmほどの矢板をたて並べて護岸しており、幅二・二

m、深さ五〇cmで東西にのびている。今回紹介する木簡もここ



からの出土である。

同時に出土した遺物は、丸鞆・巡方・鉈尾などの腰帶の装飾品や琵琶の腹板、木製鏡、鞆の羽口、土馬、銅製容器、墨書き土器、灰釉

陶器、曲物・椀などの木製容器、糸巻きなどの機織具、それに人形などの木製祭祀具と豊富である。遺物等からの遺跡の年代は九世紀前半ごろと考えている。

8 木簡の訳文・内容

(1) 「四月廿四日 土井廿

□□□□ 入旦〔後カ〕〔以カ〕
□□□□ 文儒〔久カ〕

入□□本□ 調布一端
入□□□□

太□□五文□□ 入史生〔健吉カ〕
〔所カ〕

495×45×5 011

(2) 「正月廿六日下 人里上六〔分カ〕
月刀 支自 人持□□□刀支自 □□□□ □□一□〔分カ〕
直六分カ」

・「 □□□□□ 春子丁

(395)×(20)×6 081

「▽物部〔諸カ〕〔質カ〕
長□□支一□□□□□▽」 168×29×6 031

「 □□□□□ 寿カ」

495×45×5 011

(4) 「▽物部真貞質置馬〔曳カ〕
子十五隻〔引口〕」 252×37×5 033*

(92)×47×3 019

依□社『厨』□□□

□

依□社『厨』□□□

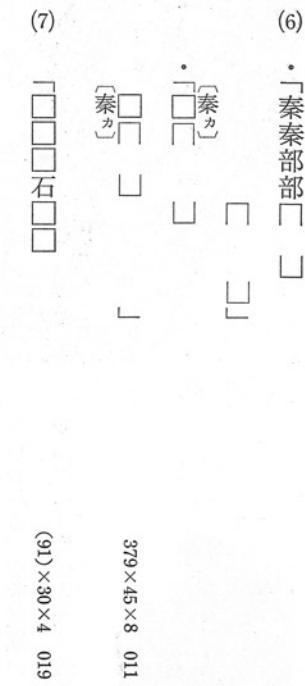
□

(5)

「 □□□□□ 依

依□社『厨』□□□

□



馬一宮出石神社を指すと推定できる。(6)は習書と見られる木簡であるが、「秦」と書かれた墨書き器が今回の調査地でも見つかっており、また以前の調査でも「秦部」と書かれた木簡が出土するなど『木簡研究』(一四)当遺跡と秦氏は何らかのかかわりがあるのかもしれない。この遺跡では今回ようやく本格的な建物群の一部が検出でき、遺跡の性格を考える上でも変化が生じてきた。今後周辺での調査が期待される。

私読にあたり奈良国立文化財研究所の寺崎保広氏のご教示を得た。
(小寺誠)

- (1) 木簡は全部で七点ある。(1)は長大な木簡で、「入」の文字が数箇所にあり、何らかの物品の出入りの管理に関する内容とみられるが、判読できる文字数が少ないため全体の内容は不明である。ただ「調布」や「史生」などの文字から公的な施設での出納に関するものかと推定される。
- (2)の冒頭の日付であるが、以前当遺跡から出土した木簡(『木簡研究』一)にも同日の日付があり興味深い。この木簡についても書かれた内容ははつきりしない。
- (3)(4)はともに物部氏の「諸長」「真貞」なる人物が物品を質に入れたことを示す木簡である。「質」あるいは「質物」といった言葉が正倉院文書の月借錢解などに見られ、官人が所属官司に給料の前借りとして質入れをしたことが知られる。ただし、この木簡は文書の木簡ではなく、形状からみて、質物の付札であろう。
- (5)は二文字目が「一」と読めるならば、袴狭遺跡の南に存する但